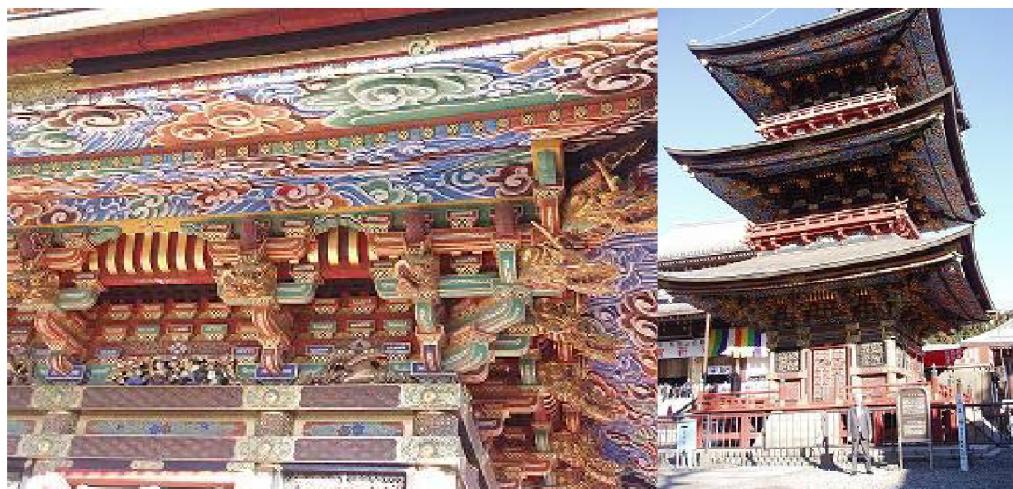


72号 成田山 新勝寺

1月8日恒例の成田山深川講の初詣でに参加した。当日は早朝7時出発、新春に相応しい素晴らしいお天気に恵まれ一路成田さんへ、一時間余りで到着しおまいりの後11時まで自由時間である。今回はしっかりと、成田さんの建物をつぶさに拝見しようと、同行一名といくつかの建物を検分した。なかでも素晴らしい三重塔をご紹介する。重要文化財に指定されている木造のこの塔は本堂広場の東側に位置し、本堂を守る構えである。正徳2年1712年に建立され、以後約50年ごとに大修理を行い、昭和58年に現在の姿に復元されたものである。塔の高さは相輪頂上まで、高さ25メートルである。柱、長押、台輪などに地紋彫り、各層先端部に龍の丸彫り、脇間板壁には十六羅漢の彫刻、板軒は雲紋の浮き彫りにして、極彩色を施し、江戸中期の極めて華麗な塔だ。建立からやく300年の素晴らしい建物だ。58年の大修理の時に出てきた古文書に基づき、当時の漆塗り、極彩色の工法で復元した。

材木を業としているものにとって、素晴らしい建物の感激である。彫刻の素晴らしさに加えて、豪華絢爛たる極彩色に触れてまるで江戸時代に帰ったような印象である。近年は木造から、鉄筋コンクリートの寺院が建てられ、無味乾燥味氣ないものがほとんどとなってしまっている。ちなみにこの成田山新勝寺の正面本堂は鉄筋コンクリート造りである。実に無味乾燥な建物である。木材は、メンテさえ確り行えば、数百年の年月をへてもびくともせず、しかも確りした技術による工法に加えて、装飾が素晴らしい限りだ。このように木材は使い方さえ誤らなければ、長持ちして、素晴らしい技術を後世に伝えることができるるのである。機会があれば、ご一見、ご一覧を頂き、木材に逆風が吹いているいまこそ木造のよさをご認識いただき、木材の復権と更なる需要の拡大ご尽力賜りますようお願いする次第でございます。

三重塔の写真



73号

成田山 深勝寺一2

成田さん初詣でもう一つ強烈に印象に残ることがあった。本館の裏手には成田山の有名な庭園がある。参道を巡らし石塔、記念碑には日露戦争から始まる歴戦の勇士の名前が刻まれているまた高額寄付者のご尊名も掲示されているものが無数に配列されている。谷底には東屋と水鳥が遊ぶ池があり訪れる人の目ほっとした癒しを与えてくれる。こんな庭園の奥の手に、有名な成田さん書道美術館がひっそりとたたずんでいる。今、大本山成田山深勝寺では、当山中興の祖であり、真言宗中興の祖、興教大师850年御遠忌の記念事業を実行中であるが、この記念事業として開館したのがこの美術館だ。この美術館は書道界と大本山の長年にわたる御縁の開花と教えられた。美術館館長鶴見照碩氏による解説によれば、日本書道界と中国書道界の交流は深く昭和63年競書大会訪中時に登った中国の名峰五岳第一の聖山の泰山に登山した。泰山は真言行法所縁の名山である。泰山には歴代の諸侯が岩山岸壁に書いた名書が数多く残り、真言宗の名山とともに、書道界の名山である。唐玄宗（開元14年（726年）刻）の御書 紀泰山銘が刻まれているこの拓本が展示されている。拓本と簡単に言うが高さ13メートル幅？大壁画である。この拓本は唐玄宗の御真筆であると言われている。この紀泰山銘は唐玄宗のお考えが刻まれている。私はこれが見たくて行ったわけではないが偶然にもこのような名書にめぐり合えたのは幸せとおもう。チャンスあれば是非この泰山に登りたいものだ。

74号

節分祭

節分祭に参加するため徹夜で順番を待つことになった。参加者のためのテントが設営され徹夜不眠で、整理券を貰うことになった。中国では、春節と言って「節分」を歳の初めとし、立春新年を「新年好」と祝う。日本でも旧暦の新年、節分とは、文字通り季節の別れめ、長い冬が開け今日から春、花は咲き、木々が芽を吹き躍動の、活動の春、目の前が明るくなり希望に満ちた新年、昔の人は賢いと思う、一番寒いのは、一月の中旬から下旬にかけての期間が厳冬、即ち寒さが一段と厳しい季節だ。忌中の挨拶には、「寒中御見舞い」とある通り、雪が降るのは歳が明けてからだ。少年の頃の記憶では、深川の運河が凍ったのは一月だ。ともかく、節分祭に、自分を鍛えるために、参加している。当日は、徹夜で新しい歳を迎える、立春を祝う、入り口は、まず眠らずに立春を迎えることだ。本番では、精神を鍛えることだ。山伏の火祭りを想像願いたい。この火祭り、室内で催すのが凄いことだ、煙で視界はゼロ、しかも高温で火事場のような状況だ。火祭り催行中の移動は厳禁、席を立つのは許されない、顔の高さの空気の層の温度が非常に高いこと、高温のため酸素が欠乏し呼吸困難になる恐れがある。こんな状況の中で約二時間半の火祭りが行われ、参加者は火事場のような高温、煙のなかで自分と戦い、意志を貫き修行する場だ。私は意志を貫く修行として参加している。人間はともすれば、自分に甘く、驕り高ぶりがある、特に高齢になれば、こんな傾向が強くなるのが人間の弱いところだ。叱咤激励、精神を鍛える場が必要だ、できる限り参加し、自分と戦っている、不思議なもので猛烈な高温、目や喉を刺す煙、そして、強烈な足のつりなど、肉体的な限界には耐えられ、我慢ができるようになった。しかし肝心の精神は、まだまだ未だしで遠い道であり、これで終わりということはない、一段登れば、次の一段があり、人間の向上の道に終わりない、次の一段に向かって、力の限り挑戦を続ける毎日です。皆様のご指導をお願い申しあげます。



C E O 7 5 号

パソナ P A S O N A 観察

東京商工会議所 江東支部異業種交流会では、パソナが最近はじめた全く太陽の光を遮断した地下室での水耕栽培を観察した。つい先ごろには小泉総理大臣も観察し、テレビにも放映され話題になったところだ。

今回の当番幹事 清水氏の提案で実施した。

パソナそのものは、南部靖之氏が始めた全く新しい人材開発事業、わずか30年で資本金82億円、売上高1792億円、海外まで含めたグループ企業43社、従業員2200名、東京と大阪の中心地にそれぞれ本社を持っているサクセスストーリーそのものの会社だ。

パソナがはじめた水耕栽培は全く新しい分野で興味津々期待を持って観察した。

パソナの東京本社は、旧大和銀行のビルをそっくり買い取り地下の金庫室約1000平方メートルパソナ02と名づけた地下植物栽培場だ。設立のコンセプトは、パソナの基本理念社会問題の解決、雇用の創造を作り出す働き方の提案として、都会でもできる農業、更に地球資源問題から発生する様々な諸問題の解決の糸口として、農業を新しい産業として育て上げるために、働き甲斐のある雇用創出のモデルケースとして提案している。しかも農業を全く知らない、農業を新しいビジネスとして始めたい人々に新しい技術の採用を使って、農業の実体験をして、理解と興味を深める場である。

光線と温度管理により、六つのエリアに別けられている。

1. 花畠 発光ダイオードによる花の栽培 成長に合わせ必要な波長、赤青緑白 LED
2. ハーブ畠 メタルハライドランプ 放射性青色光により約100種 香りのよいハーブ
3. 棚田 メタルハライドランプ・ナトリュームランプ 稲の栽培年三回の収穫
4. トマト 水耕栽培 3メートルの巨大幹 数百の巨大トマト 年3回収穫
5. 野菜畠 メタルハライドランプ 伝統的な京 野菜・九条葱 壬生野菜
6. 育苗室 人工的なコントロール、天候、場所に左右されず連続的に生産、蛍光灯使用

パソナ P A S O N A 観察

パソナとは南部 靖之氏が創立した人材開発を目的とした会社だ。

創立 1976年・設立 1989年

資本金 82億85百万円

東京本社 東京都千代田区大手町 大手町の野村ビル

事業内容

人材派遣／請負事業・人材紹介業・再就職支援事業・アウトソーシング事業・教育研修

売上高 連結1792億円・単体1320億円

従業員数 連結2204名・単体1219名

グループ企業 国内32社・海外11社

企業理念 社会問題の解決 人を活かす

使命 就用の創造



行動指針 チャレンジ

東京商工会議所 江東支部異業種交流会では、パソナが最近はじめた全く太陽の光を遮断した地下室での水耕栽培を視察した。つい先ごろには小泉総理大臣も視察し、テレビにも放映され話題になったところだ。今回の当番幹事清水氏の提案で実施した。

パソナそのものは、南部 靖之氏が始めた全く新しい人材開発事業、わずか30年で資本金82億円、売上高1792億円、海外まで含めたグループ企業43社、従業員2200名、東京と大阪の中心地にそれぞれ本社を持っているサクセスストーリーそのものの会社だ。

パソナがはじめた水耕栽培は全く新しい分野で興味津々期待を持って視察した。

パソナの東京本社は、旧大和銀行のビルをそっくり買い取り地下の金庫室約1000m²パソナ02と名づけた地下植物栽培場だ。設立のコンセプトは、パソナの基本理念社会問題の解決、雇用の創造を作り出す働き方の提案として、都会でもできる農業、更に地球資源問題から発生する様々な諸問題の解決の糸口として、農業を新しい産業として育て上げるためにも、働き甲斐のある雇用創出のモデルケースとして提案している。しかも農業を全く知らない、農業を新しいビジネスとして始めたい人々に新しい技術を採用を使って、農業の実体験をして、農業への理解と興味を深める場である。光線と温度管理により、六つのエリアに別けられている。

1. 花畠 発光ダイオードによる花の栽培 成長に合わせ必要な波長、赤青緑白 LED
2. ハーブ畠 メタルハライドランプ 放射性青色光により約100種 香りのよいハーブ
3. 棚田 メタルハライドランプ・ナトリュームランプ 稲の栽培年三回の収穫
4. トマト 水耕栽培 3メートルの巨大幹 数百の巨大トマト 年3回収穫
5. 野菜畠 メタルハライドランプ 伝統的な京 野菜・九条葱 壬生野菜
6. 育苗室 人工的なコントロール、天候、場所に左右されず連続的に生産、蛍光灯使用

未完

o a z o

丸の内の旧国鉄本社ビル、旧丸ビル、丸の内ホテルなどのある一角がこのほど再開発され広大な複合施設に生まれ変わった。

東京駅の北口と永代通りの角地にある一等地である。

永代通りに面していた丸の内ホテルは、東京駅の北口前に玄関を構えている。

ホテルエリアは8階から17階まで10フロアを占有し、首都東京の玄関口、丸の内にふさわしい構えだ。

o a z oとは、案内書によれば、エスペラント語で「憩いの場」即ちオアシスを意味する言葉だ。丸の内のマルと、大手町のオーを連結して、a t o z（全て）の知的なオアシスの街が、丸の内 **o a z o** だ。地上17階、地下1階で地下鉄とJRに直結している。

地下のエリアは丸の内センタービルとショップ&レストラン、一階には、見上げるような、吹き抜け天井を、中央に配し、丸の内センタービル、ショップ&レストランが並ぶ、2階から6階までは丸善書籍と新丸の内センタービルのエリアでクリニックなどが、配置されている。7階から丸の内ホテルのロビー、レストラン、バーだ。8階から17階までが冒頭にふれた丸の内ホテルが続いている総合複合施設の大エリアだ。最近の開発はお台場、六本木、汐留、品川、丸の内、旧防衛庁跡、そして丸の内 **o a z o** と続いてきた。

丸の内 **o a z o** は、これらの再開発地域のなかで、抜群の地の利を占めている。なんと言っても首都東京の玄関口である。首都の玄関口といえば日本の玄関口でもあり、しかも利便性に優れている。ご存知と思うが、一度訪問される価値は充分にある。75号でご紹介したパソナの地下農場、水耕栽培、巨大トマトなどを視察され、帰りに **o a z o** へ行かれればよろしいかと、ご参考までにご紹介しました。



77号 本原稿

JID協会によるこれからの日本の住まいとインテリアの関わりと銘打った講演会を聞いた。講師は小畠清治氏、(財)日本開発研究所 理事 業務開発部日本住宅公団在職中に都市型集合住宅の建設にかかわり、戦後の日本の受託政策の中心的存在であった都市再生機構(住宅公団)が行ってきた住宅政策の成果と、21世紀に入り多元化・多様化した住宅及び住み方について様々な問題について議論が続くな、住まいの基本であるインテリアデザインについての可能性についてのお話を聞いた。集合住宅が時代の要請、ニーズとともに変遷を重ねてきた歴史から、これからの都市における住宅のあり方、人と住まいの関わり、住宅から世相を見通す示唆を受けた。

戦後の日本は、日本経済復興の為に必要な勤労者の住宅を確保するためにまた、国際的にはILOの勧告を受けて、耐震耐火住宅を安く・早く・大量・供給するために、日本住宅公団により、1955年、代官山に同潤会アパートを建設した。日本で始めての耐震耐火の集合住宅で、インテリアは風呂付2DK当時としては素晴らしい合理的な集合住宅だ。しかしコストは約6倍の金額となり、問題になったが日本の集合住宅のモデルとしての評価がたかい。現在でも八王子にある建築センターに展示されており、建築関係者、学生、建築に関心のある人々に关心と人気のあるモデルだ。次に建設されたのは、1958年、中央区晴海に建てられた前川アパートだ。優れた建築家前川クニオ氏の設計によるものであり、日本初のエレベーター付高層住宅だ。画期的な高層住宅として注目され、关心が高かったが、晴海地区再開発のため建築家の反対にも関わらず残念ながら取り壊された。次の波は、都心から郊外へ、高層大規模団地への流れだ。

1979年英国風の集合住宅を目指して高島平団地が建設された。住まい三種の神器は①シリンドー錠前②洋風便器③ステンレス流し台(ダイニングキッチン)が売りの団地だ。ところが、外形は、壁がならび、圧迫感、疎外感が強く評判はよくない、次の問題として、壁の角度など工夫が必要とされた。諸外国、ブラジリアでは近隣との交流ができない、ドイツのブレーメンでは自己が見失われるト不評、アメリカセントルイス市のブルーイットアイゴンでは住民に受け入れられず、取り壊された。大型の500戸以上のマンションは日本だけになつた。ここで、世界共通の認識として言えることは、ただ、箱を造りそこえ住めと言つても、人間の感性を無視してただ合理性効率性の意味を追求しても人間は住めないことになる。住まいとは、一日の疲れを癒し、明日への活力を再生産する空間だ。そこには、自分の城としての、パーソナリティーから発信する癒し、潤いから安心、そして安全な、快適な空間だ。いくら合理的、効率的でも人間には生物的本能があり、この本能を満足できなければ、人間は癒されず、安心できず、成長しない。本能の満足はドコから得られるか、人間が成長した過程のなかで、認識してきた自然天然の素材である。天然の素材が住宅に使われてこそ、人間の本能が満足し、癒し潤い安心、そしてハードの面ではほぼ満足できる状態になり、防犯面での住宅の性能は確保されている。そこでのこるは、ソフトの面で

あり、ここでインテリアの重要性がクローズアップされている。

集合住宅の流れは、高層から超高層へと重心が移ってきた。特に都市部においては建設用地の不足により、土地争奪戦は、激しく優良物件はバブル期の相場に近づく昨今だ。したがって時代は上へ上へと超高層に向かって限りなく進んでいる。こんな超高層の時代に、箱だけ造り合理性のみ追求するわけにはいかぬ。そこでここからがインテリアの出番だ。そもそも、インテリアとは、空気の創造の創造であり、住んでいる生活者の、感性に訴える、居住者の五感に訴えることがインテリアの仕事であり、インテリアを作るのは、インテリアデザイナーのしごとだ。そこで一階層を半分高めて、登りくだりの階段7段をつける画期的な中一階のデザイン、この提案が某デザイナーから提案されたのが、バブル最盛期の頃だ。この提案は実に素晴らしい提案であり、モデル住宅として募集したところ、応募者が110倍になるほどの人気があった。

一階の天井高が、半分高く、圧迫感払底、70m2夫婦二人住まいの住まいだ。高い天井から、スイッチ一つでシャンデリアが降りてくる、壁の裏側に収納を納め、スペースを広くとり、ゆうゆうタップリを、売りとしている。これは素晴らしいが、コストパフォーマンスにそぐわざと、公団は次のプロジェクトを断念した。数年前お台場の超高層マンションに、このシステムが発売され評判も良かったが、そのごとのシステムが発売されたと聞いていない、やはりコストパフォーマンス優先公団か？とがっかりした。

もう一つ、最も重要な問題がある。これからのお宅は、集合、戸建てに限らず、ファミリータイプのマンションは必要ない。いわゆるファミリがいない。子どもが結婚しない。子供をつくらない社会だ。政府でいくら援助しても、世の中は変えられない結婚しない層が増えていく、80m2、70m2は中途半端だ、金持ち向け、150m2以上か、結婚しない女性相手の40～50m2の中級高級マンションが狙い目だ。世の中は確実に動いている。少子高齢化の時代は、住宅の構造変化に大きな影響を及ぼしていく。

ここで使われる材料は、人間の五感を満足させる素材を使ったインテリア、更に住みよく使い勝手もよろいしい住宅が評価される時代だ。今こそ木材の復権に業界あげて立ち上がる時だ。皆様のご協力に期待する・

77号 これからの日本の住まいとインテリアの関わりー1

(財)日本開発研究所 理事 小畠清治氏の講演から小畠氏は、都市再生機構（住宅公団）在職中に都市型集合住宅の建設にかかり、多元化・多様化した住宅及び住み方について様々な問題について、住まいの基本であるインテリアデザインについての可能性についてのお話を聞いた。集合住宅が時代の要請、ニーズとともに変遷を重ねてきた歴史から、これからの都市における住宅のあり方、人と住まいの関わり、住宅から時代と世相の見通しについての参考になった。

戦後の日本

日本経済復興の為に必要な勤労者の住宅を確保するためにまた、国際的にはI.L.Oの勧告を受けて、耐震耐火住宅を安く・早く・大量・供給するために、日本住宅公団により、1955年、代官山に同潤会アパートを建設した。日本で始めての耐震耐火の集合住宅で、インテリアは風呂付2DK当時としては素晴らしい合理的な集合住宅だ。しかしコストは約6倍の金額となり、問題になったが日本の集合住宅のモデルとしての評価がたかい。現在でも八王子にある建築センターに展示されており、建築関係者、学生、建築に関心のある人々に关心と人気のあるモデルだ。

第二の波

次に建設されたのは、1958年、中央区晴海に建てられた前川アパートだ。優れた建築家前川クニオ氏の設計によるものであり、日本初のエレベーター付高層住宅だ。画期的な高層住宅として注目され、関心が高かったが、晴海地区再開発のため建築家の反対にも関わらず残念ながら取り壊された。

第三の波は、都心から郊外へ、高層大規模団地への流れだ。

1979年英國風の集合住宅を目指して高島平団地が建設された。住まい三種の神器は①シリンドー錠前②洋風便器③ステンレス流し台（ダイニングキッチン）が売りの団地だ。ところが、外形は、壁がならび、圧迫感、疎外感が強く評判はよくない、壁の角度など工夫が必要とされた。諸外国、ブラジリアでは近隣との交流ができない、ドイツのブレーメンでは自己が見失われるト不評、アメリカセントルイス市のブルーアイットアイゴンでは住民に受け入れられず、取り壊された。大型の500戸以上の集合住宅は日本だけになった。

78号 これからの日本の住まいとインテリアの関わり－2

箱だけでは受け入れられない・木材が最高の癒しの素材

ここで、世界共通の認識として言えることは、ただ、箱を造りそこへ住めと言っても、人間の感性を無視してただ合理性効率性の意味を追求しても人間は住めないことになる。住まいとは、一日の疲れを癒し、明日への活力を再生産する空間だ。そこには、自分の城としての、パーソナリティーから発信する癒し、潤いから安心、そして安全な、快適な空間だ。いくら合理的、効率的でも人間には生物的本能があり、この本能を満足できなければ、人間は癒されず、安心できず、成長しない。本能の満足はドコから得られるか、人間が成長した過程のなかで、認識してきた自然天然の素材である。天然の素材が住宅に使われてこそ、人間の本能が満足し、癒し潤い安心、そしてハードの面ではほぼ満足できる状態になり、防犯面での住宅の性能は確保されている。そこでのこるは、ソフトの面であり、ここでインテリアの重要性がクローズアップされている。

インテリアデザイナーの出番

集合住宅の流れは、高層から超高層へと重心が移ってきた。特に都市部においては建設用地の不足により、土地争奪戦は、激しく優良物件はバブル期の相場に近づく昨今だ。したがって時代は上へ上へと超高層に向かって限りなく進んでいる。こんな超高層の時代に、箱だけ造り合理性のみ追求するわけにはいかぬ。そこでここからがインテリアの出番だ。そもそも、インテリアとは、空気の創造の創造であり、住んでいる生活者の、感性に訴える、居住者の五感に訴えることがインテリアの仕事であり、インテリアを作るのは、インテリアデザイナーのしごとだ。そこで一階層を半分高めて、登りくだりの階段7段をつける画期的な中一階のデザイン、この提案が某デザイナーから提案されたのが、バブル最盛期の頃だ。この提案は実に素晴らしい提案であり、モデル住宅として募集したところ、応募者が110倍になるほどの人気があった。

一階の天井高が、半分高く、圧迫感払底、70m2夫婦二人住まいの住まいだ。高い天井から、スイッチ一つでシャンデリアが降りてくる、壁の裏側に収納を納め、スペースを広くとり、ゆうゆうタップリを、売りとしている。これは素晴らしかったが、コストパフォーマンスにそぐわざと、公団は次のプロジェクトを断念した。数年前お台場の超高層マンションに、このシステムが発売され評判も良かったが、そのごとのシステムが発売されたと聞いていない、やはりコストパフォーマンス優先公団か？とがっかりした。

結婚しない若者

もう一つ、最も重要な問題がある。これからの住宅は、集合、戸建てに限らず、ファミリータイプのマンションは必要ない。いわゆるファミリ�이がない。こどもが結婚しない。子供をつくらない社会だ。政府でいくら援助しても、世の中は変えられない結婚しない層が増えていく、80m2、70m2は中途半端だ、金持ち向け、150m2以上か、結婚しない女性相手の40～50m2の中級高級マンションが狙い目だ。世の中は確実に動いている。少子高齢化の時代は、住宅の構造変化に大きな影響を及ぼしていく。